

東南アジアの歴史的街屋建築に関する研究 (2)

泉田 英雄

キーワード：1) 都市住宅，2) 街並み，3) 居住地パターン，4) 南中国，5) 東南アジア，6) Urban House，
7) Townscape，8) Settlement Pattern，9) South China，10) Southeast Asia

1. はじめに

本研究は，1992年度に行なった同名の研究No.9204の継続研究である。今回はヴェトナムから中国南部までの沿岸に存在する歴史的都市を扱い，先回と同様にこの地域の居住地パターンと街屋建築の類型を明らかにすることを目的とする。加えて，これまでの調査成果と比較して，全体としてどのような建築的特徴があるのかを検討してみたい (図1-1)。

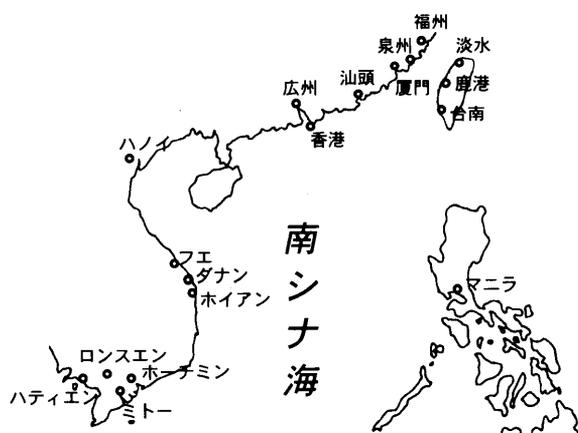


図1-1 調査対象都市

先回の調査結果をまとめると，次のようになる。

- ①15世紀以降の歴史的都市は中国との交易のために沿岸に集中し，中国系住民が居住者の大多数を占めていた。
- ②波止場から直角の位置に媽祖あるいは天后廟が置かれ，この2つを結ぶ通りが第1次の市場通りとなる。
- ③波止場と並行して媽祖あるいは天后廟の前を通る道ができ，ここが第2次の市場通りとなり，住民の日常生活用品や貴重品などを扱う。
- ④波止場や媽祖通りに沿って最初の仮設的構造物が作られ，続いて波止場と第2次市場通りの間に街屋建築が形成されて行く。
- ⑤街屋の間口幅は4～6mが一般的で，これは梁材の長さに左右される。
- ⑥権力側からの規制がない限り，商売がうまくゆき定住期間が長くなれば，その家族によって街屋は波止場側から奥の方に拡張されてゆく。

⑦街屋の拡張は，部屋の1面が必ず中庭に接するように奥に向かって行われる。

⑧玄関を入った最初の部屋は客を迎え，祖先をまつフォーマルな空間で，奥に行くに従って家族の空間となっていく。

上記のことをヴェトナムから中国南部の沿岸の歴史的都市の事例と比較して，相互関係を考察してみたい。

2. ヴェトナム沿岸

既往の研究で指摘されていることであるが，1992年度の我々の調査で東南アジアの歴史的都市は河川流域あるいは海岸線に形成され，さらにその居住者が中国系住民で占められていた。そうすると，そこで見られた居住地パターンと住宅形態は，居住者祖先の出身地である中国南部や両者の中間にあるインドシナ半島東海岸の都市のそれと，強い関係にあることが予想される。

インドシナ半島の中でヴェトナムは，中国と陸続きであるため漢代からおよそ10世紀の間中国の直接支配を受けてきた。11世紀初め李朝が初めて中国から独立したが，直接支配域は北部の一部しかなく，各地の土豪が封建領主として農村集落を支配し，さらに南部ではチャンパ王国がインドラプラヤやヴィジャヤなどの港市を基地として東西貿易によって繁栄していた。これらの居住地のうち，生産基地としての村落は今日まで残っているが，チャンパ王国については宗教関係を除くと建築遺跡は発見されていない。その後16世紀に入ると貿易活動は中部においてはカンナムグエン (広西阮) 氏が支配し，フェイフォ (現ホイアン)，ダナン，フエという港市を築いた。南部では莫氏がハティエン，また清朝支配から逃れてきた明朝支持の中国系住民がミトーやカントーなどを作った。これらが今日残っているヴェトナムの歴史的都市である。

2.1 ホイアン

この都市について1990年にヴェトナムのダナンで国際シンポジウムが開催され，その後昭和女子大学が中心となって街並み保存と歴史調査が進められているので，東南アジアの中で最も資料が整っている歴史都市の1つである。

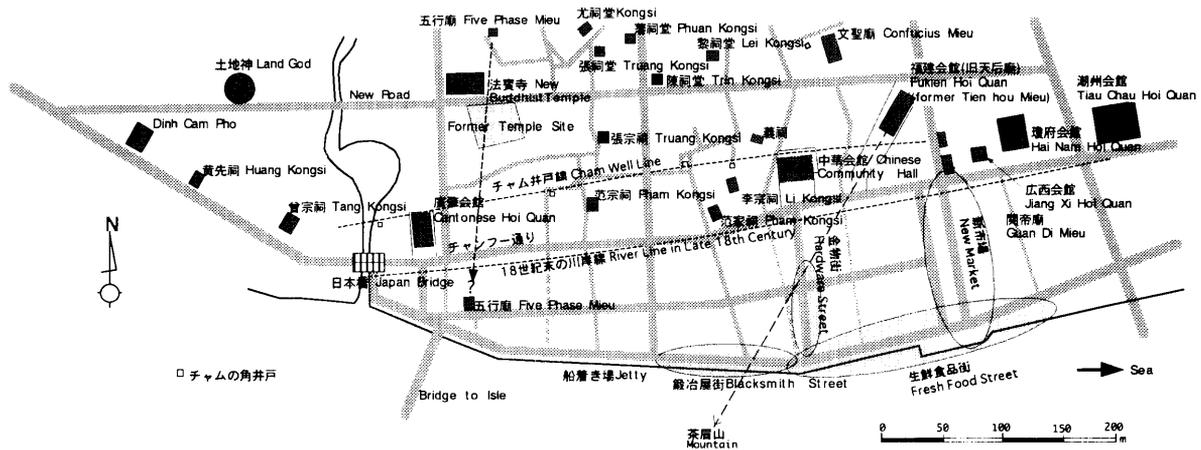


図2-1 ホイアの居住地パターン

居住地パターン

初期居住地は東方に流れるトゥボン川がゆるく凸状に蛇行するところに築かれ、18世紀末には今日のチャンフー通りが川岸であったことが発掘調査からわかっている(図2-1)。南面する川中にはアンホイ(現在は陸続き)とカムナムの2つの中州があり、後で述べるフエや泉州と同じように東側を青龍、西側を白虎に見立てる風水の影響が窺える。この通りの北側に初期の建物が建てられ、廟や個人の住宅などが現存している。その中で最も古い建物が1697年に天后廟として建設された福建会館(1757年再建)で、これが唯一通りに対して直交せず、通りから少し奥まったところにある。その南南西の軸線上には仙人が住むという茶眉山を望むことができ、これは中国の神仙思想に倣ったものであろう。さらに、この会館の東側に位置する仏教寺院を文明(光)に、西側の祠堂を冥土(闇)に見立てることもでき、ホイアン初期居住地は中国人のコスモロジーをもとに、天后廟を中心として形成されたことは明らかである。

華人街ホイアン最古の天后廟がチャンフー通りからかなり入ったところに置かれているということは、18世紀半ば頃にはチャンフー通りの北側にもう1本東西に走る道があり、そこで川岸に接していた可能性がある。天后は最初媽祖として福建省で信じられた経緯から福建省出身者の主神となり、一方居住地西側の商売繁盛の神である関帝は広東省出身者によって広筆会館と名付けられた。これら2つの間には中華会館があるが、これについては由来が不明である。だが、後述するフエのティンハの場合にも3つの廟建築があり、奇異なことではない。

街屋類型

チャンフー通り北側の歴史的住宅は街屋形式だけではない。むしろ、1戸建ての方が古く、その通りに面する敷地が次第に細分化されるとともに、建物も間口の狭い街屋形式になっていったと考えられる。というのは、両者とも主要構造架構は2段登り梁であり、ヴェトナムの

歴史的建築物に最も普通に見られる形式である(図2-2)。異なる点は、街屋形式として後方に延長させるために主屋の裏に設けられた副屋の屋根構造である。図2-3は19世紀初頭に福建会館の借家として建てられたもので、ヴェトナム在来の登り梁形式の主屋に、自らの出身地の重ね梁形式の後屋を付け足したのであろう。

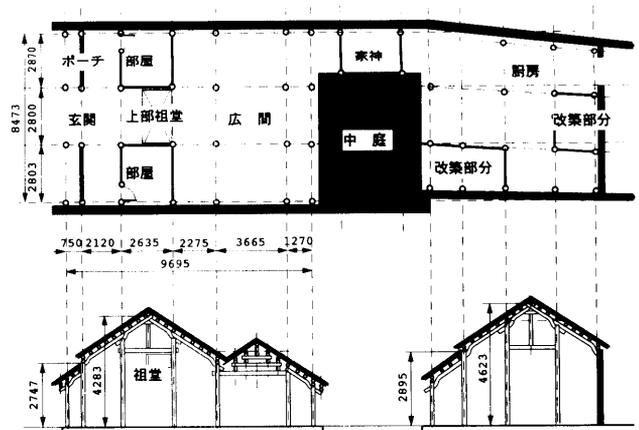


図2-2 ホイアの街屋 事例1

2段登り梁形式は中国南部には見られず、ヴェトナム地方で独自に発達したものと思われる。この架構を含めてホイアンの歴史的街屋には1つの基本形があり、特定の大工集団が良材を使って長らく安定した生産を続けていたのであろう。

建物平面は左右対称を基本とする。通りに面して庇が出ており、その奥に主屋と副屋が並ぶ。これら2つの屋根の間に谷が形成されることになり、これは熱帯アジアモンスーン地域にあって非常に珍しい。間口幅は四角柱を中央に置くために3間となり、また主屋奥行きも2段登り梁形式に合わせて3間である。左右の側面には煉瓦壁が築かれ、隣家と壁を共有することはない。間口中央部分が後方に続く通路となっている。

聞き取り調査によれば、ホイアンのほとんどの街屋住

民はかつては何らかの商売をやっており、底下の露台や主屋の前面部分に商品が並べられていた。その奥は間仕切られ寝室となり、また主屋の一番奥と重ね梁の副屋は連続して最も広い空間となり、家族のために使われる。

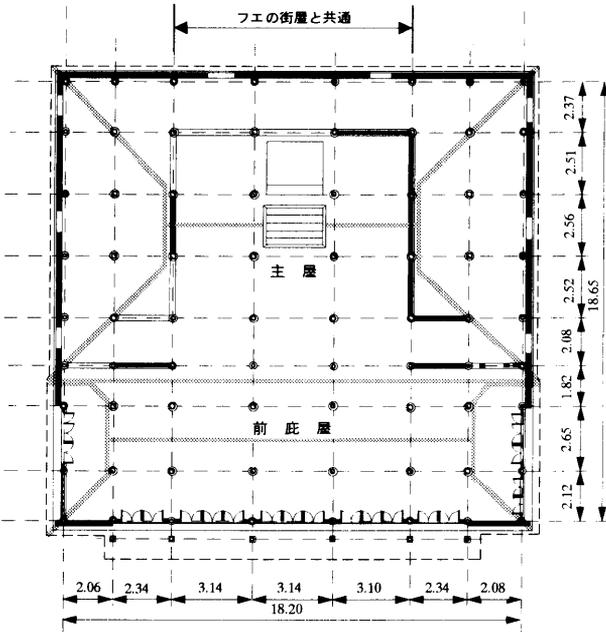


図 2-3 ホイアの街屋 事例 2

2.2 フェ

もともと土豪カンナムグエン氏の居城があったところで、1802年ギア・ロン帝は国内を統一しここを新都とすることを決めると、1804年京城の建設にとりかかった。ここが選ばれたのはソンフォン川が西から東に凸状に緩く蛇行し、2つの中州があり、また南南東方向に小高い丘を望むことができ、風水と神仙思想の吉地に合致するからであろう。また、京城が南面し、その左右に役人の居住地が定められたのは儒教の影響であろう。このようにグエン氏には中国文化の影響が非常に顕著であったが、一方で後述するように居住者には独自の厳しい規制を設けたようだ。

京城から1kmほど下流にタインハ（清河）と呼ばれる地域があり、明朝末に中国南部から移民してしてきた人たちが最初に住んだといわれている。彼らはホイアンや中国南部との交易を通してグエン氏の財政を潤していた。しかし、京城が築かれるとともに華人居住地はそのすぐ外のドンバに移され、タインハは廃れてしまった。現在は廟（何度も修復されている）、井戸、境界石、石敢当などの遺構を除くと、当時の建築物は残っていない。

居住地パターン

タインハの初期華人居住地はソンフォン河が北方に流れる西岸に作られた。明確に居住地境界が定められ、川

岸から約150mの幅のところに境界石が置かれ、北側の天后聖宮（現 仏寺）と南側の関帝廟（現 仏寺）に挟まれた一帯であった。真ん中を通りが1本南北に走り2つの廟の間にもう1つあったらしいが、建物は現存していない。このように、フェの初期華人居住地では廟が境界の役割を果たしていた。また、それぞれの廟の前の道が船着き場まで続いており、かつてはこの一帯に市が立っていたのであろう。廟と同じように、境界石から屋敷区画は基本的に四角形をしていたことが分かり、周囲が生け垣で囲まれた1戸建ての建物が建っていたに違いない。1戸建てからなる華人居住地の事例はジャワ島のラセムでも見られ、これは初期の住民が明朝を支えていた官吏たちであり、商売よりも儒教にのっとった居住地作りを行なったためであろう（図 2-4）。

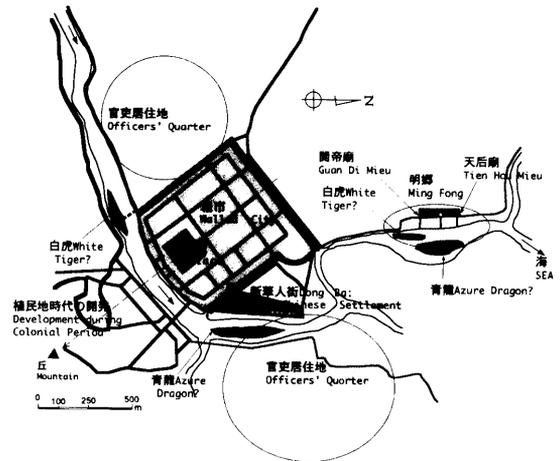


図 2-4 フェの空間構成と居住地パターン

京城が作られると、華人たちはドンバ地区とタインハからそこに至る沿道に引っ越した。ドンバ地区には1本の通り沿いに福建、潮州、広東、海南出身者ごとに関帝と天后の廟を所有している。このうち3つは街屋からなるフォ（舗）と呼ばれるところに、後の3つはトン（村）にあり、もう廟の位置は居住地境界線にはなっていないが、ソン地区には1軒も街屋がないので、華人あるいは商人たちはフォンに街屋を建てて住まわなければならなかったようだ。おそらく、グエン朝には特別な対華人政策や職業身分制度があり、それによって居住地や建物仕様が定められていたと考えられる。このような規則については今後の研究に待ちたい。

街屋類型

タインハからドンバに至る沿道とドンバ地区で計12棟の街屋を視察し、その中で19世紀に建設され保存状態が

よいものを2棟選んで実測した。主屋の小屋組はホイアンと同じく登り梁形式であるが、古いものほど3段の例が多くなる(図2-5)。間口は3間幅で、真ん中の柱間が奥へ至る通路となる。主屋中央には四点柱が据えられ、その上部に祖堂が祭られる。後方に後屋はなく、代わって主屋の前方に必ず前屋が掛けられる。事例1のように古いものの方が前屋の束柱などに精巧な彫刻が施され、その下は何らかの商売の空間となっている。このような前屋が設けられるようになったのは、1つは構造的な理由として柱の丈が低いためにそれ以上を軒を出すことができなくなったことと、もう1つは象徴的な理由として入り口に何らかの格式を表すことになったためであろう。図2-6のようにより新しいものでは前屋は戸締まりされて、主屋と一体になっている。どちらにせよ、前屋の屋根と主屋の屋根の間にはかならず谷ができ、今回調査したところではすべて鉄板製の樋が掛けられていた。

空間の使い方は、主屋の後方が間仕切られて寝室となるほか、広い室内を商売や加工作業や家族のくつろぎなどさまざまに用いられている。主屋の奥には別棟の厨房と食堂があり、必ず煉瓦造となっている。基本的に前屋の付いた主屋とこの厨房屋の組み合わせでできており、

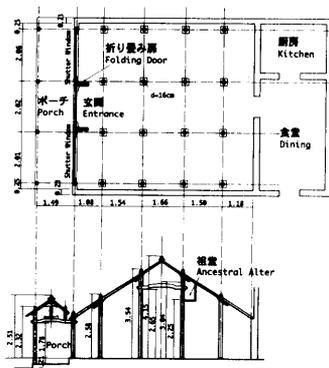


図2-5 フェの初期華人街バオピンの街屋 1886年竣工

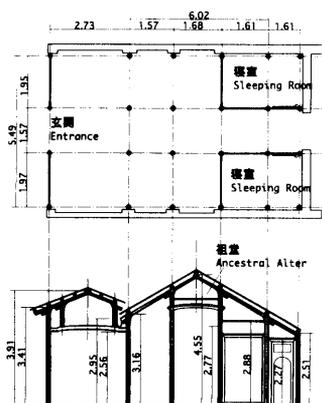


図2-6 フェ初期華人街バオピンの街屋 19世紀末竣工

これ以上奥に深くならない。その理由は、グエン朝時代奥に増築することは禁止されており、また防火のために外壁と厨房の壁を煉瓦にしなければならなかったからだといわれている。フェでこのように建物にさまざまな規制が見受けられるのは、権力から適当に離れた港市のホイアンと政治都市に隣接した居住地の違いなのであろう。

3. 中国南部福建省

福建省は、東南アジアだけではなく世界中に最も多くの華僑を輩出したところである。中国人の南方進出は宋代以前に行われていたが、元代世祖と明代初期鄭和の両遠征を契機として定住者が増加したといわれる。その後鎖国によって一時移民の数が衰退するが、明代中期から清代にかけて海賊が討伐され、さらに明朝家臣たちが追放されると、彼らは活路を南洋に求めて移住した。そこで彼らは現地王国の庇護の下でその都市に居住を許されたり、あるいは許可を得て半独立の居住地を開いた。最後の大きな移民期は東南アジアにヨーロッパ諸国が植民地都市を建設し始めた時で、その都市サービスや港湾労働力の提供者として大量に移住していった。

現地権力あるいは植民地権力の都市内居住地であれ、半独立の居住地であれ、前述したように共通した居住地パターンといくつかの街屋類型が認められた。つぎに、この特徴が彼らの出身地の都市にもあるのかを明らかにしてみたい。

3.1 福州

福州市は歴史的に福建省の政治的中心で、2つの地区から成り立っている。1つは城壁で囲まれた城市部分で、晋代に太守嚴高が風水師郭璞に頼んでここを選地し、今日の福州市の礎を築いたといわれる。唐代には土砂の堆積とともに烏山と干山の北麓まで拡大され、今日の三坊七巷地区が形成された。城壁で囲まれた城内は格子状に街路が走り、北に同知の館や役所が置かれ、南側に役人たちが住んでいた。これは中国の伝統的な行政都市の形態であり、中央権力の支配が及んだ地域にはこのような都市が次々に建設されていった。しかし、福州市の歴史を物語る住居建築遺構は極端に少なくなっている。

もう1つは城市から2kmほど南下した川岸の商業地区で、今日南台と呼ばれている。唐代には城外南側にあったが、土砂の堆積によってしだいに南方に拡大し、宋代には南台島まで浮橋が架けられた。明代1474年には福建省舶司(関税)が泉州からここに移され、さまざまな民族の人たちが居住したといわれている。琉球の冊封使節団が渡来した18世紀にはほぼ現在の港市地区が形成されていたと考えられるが、ここでも当時の遺構は極端に少ない。文化大革命時にこの地区の廟や寺院建築はほとんど取り壊されたか、あるいは全く別の用途に転用されて

しまい、さらにそれらに対する人々の信仰心も希薄になり、古老に聞かなければ廟や寺院などの施設の位置は分からなくなっている。

居住地パターン

福州市は、前述したように城市と港市の2つの居住地部分からなっている。最初の城市は明清代のものの北側半分しかなく、その位置は屏山を背にして東の干山と西の烏山に挟まれ、風水でいうところの明堂に当たることになる。さらに、閩江が西から東にゆっくりと流れ、優れて風水の好地に合致する。城内は、北端に府政司が置かれ、その南側一帯は官吏や軍人たちの居住地になった。これは中国の典型的な行政都市の形態であり、各地に権力が及ぶとともにこのような都市が建設されていった(図3-1)。しかし、南洋に移住した中国人が作り上げた居住地は、中国文化の影響が強かったが、中国の行政機能の末端が置かれることはなかった。

港市部分は時代とともに南に移動してしまい、初期の姿は不明である。宋・明代は海外貿易が隆盛し、今日の小橋から大橋までの通り(現中停街)が商業地としてもっとも賑わった。明代1474年に市舶司が泉州から福州に移転し、今日南公園となっている東部にそのための施設群(進貢廠)が設けられた。そこには琉球使節団の宿泊所であった柔遠駅とともに天妃宮が置かれ、さらに明代末から清代にかけてここに土地祠と崇報祠が加わっている。ところが、その後土砂の堆積と琉球の朝貢貿易の停止などのためこの地域の賑わいは喪失し、また周囲の再開発があって、当時の居住地パターンと史跡を知ることは非常に難しくなっている。

今回の調査で南台地域にこれ以外にもう2つ天妃宮を発見した。1つは進江南路と新廟路が交わる角地にあり、名前からして清代に柔遠駅の近くにあった天妃宮がここに引っ越してきたのだと考えられる。現在は建物は家具屋に改装されて、当時の面影は柱に残された碑文だけと

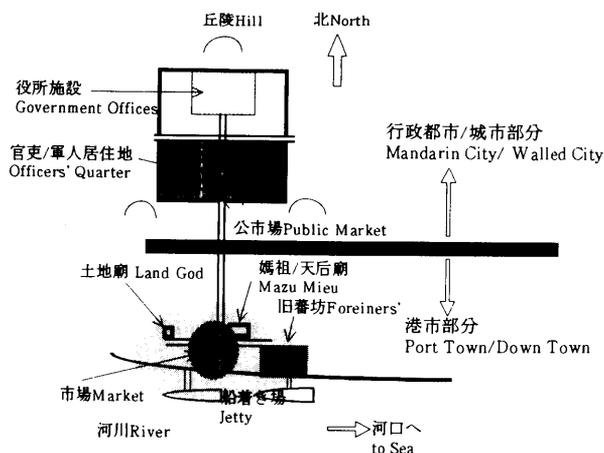


図3-1 福建地方都市の空間構成と居住地パターン

なっている。もう1つは南台西部の大廟山と呼ばれる高台の南麓にあり、ここも古くからの中州であった。この2つの周辺でも明確な居住地パターンを見つけだすのは難しいが、天妃宮がいつも重要な位置を占めていたことを指摘しておきたい。

街屋類型

城内の歴史的街屋は三坊七巷地区に百数十棟しか残されておらず、今回はその中で11棟を見学し、平面の異なる2棟を実測調査した。これらは官吏の住居として建設されたので、官式街屋と呼ぶことができるであろう。基本形は外部に煉瓦壁を巡らし、木造軸組で主屋を構成している。東立形式の小屋組である。南北の軸線に対して左右対称に部屋が配置され、そして中庭を介して奥に連続している。4m以上の幅の中央通路が入り口から一番奥まで続いており、ここに祖堂や家神が安置され、家族にとっての中心の場所であった。また、主屋の片側に使用人の住まいが併置され、主人家族とは明確に区別される。この1つの類型に対して、玄関脇の小部屋や使用人住まいや内部防火壁の存在、中庭と棟の数、うだつと木造細部の程度によって、さまざまなヴァリエーションが存在するようである。

図3-2は玄関脇に小部屋がなく、また棟が2つしかない小規模のタイプである。清代初期に建てられたもので、うだつと第1棟の小屋組装飾が他のものと比べると非常に特徴的である。主屋の片側に使用人の住まいが置かれ、その一番奥が厨房となっている。主屋は主人家族とその祖先の居所であり、中央通路の棟の下に祖堂と家神がそれぞれ置かれる。

図3-3の建物は3棟から構成されており、大きな官式街屋である。今回見学した11棟の中で7棟がこれであり、そのうち4棟が防火壁で中央通路が閉じられるようになっていた。

港市地区では10棟見学し、それらを中庭の存在によって2つの類型に分けて、それぞれ2棟ずつ実測した。城内の官式街屋に対して、ここでは港市のそれを庶民街屋と呼ぶことにする。第1の類型は中庭が1つある形式で、図3-4(事例3)は新廟路の天妃宮の近くに19世紀末に建てられたものである。この一帯は現在職工地区になっており、特にこの建物がある玉杯路は木工職人が集中していた。おそらく、昔から職工街であったのであろう。街路に近い方の棟の1階部分が作業場兼店舗になっており、その奥と2階部分にそれぞれ家族が住んでいる。一番奥が厨房になっている。図3-5(事例4)は同じく19世紀末に建てられ、前方部分が工場や店舗になっていないが、基本的に同じ形態をしている。ただしこの場合、裏側が川に面しており、後方からの出入りも可能である。図3-6と7(事例5と6)は中庭がないタイプで、棟の真ん中に寝室がおかれるのが特徴である。

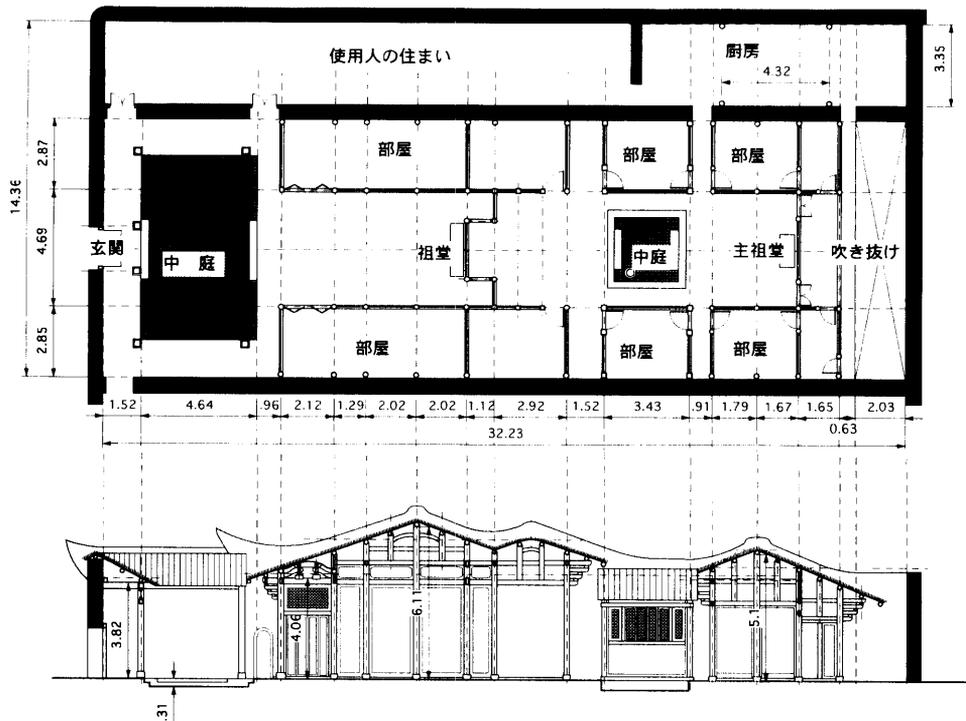


図3-2 福州の街屋 事例1

図3-6 (事例5) は清代最も賑わった中亭街から数十m中に入ったところにあり、木目の美しい福建杉の木造構造である。図3-7 (事例6) は東部の大同浦の住宅街にあり、8棟連続する煉瓦造のテラスハウスの1棟である。ともに建設年代は20世紀前半という以外定かではないが、両方とも入り口を入ると祖堂を祭った居間

と、その奥の棟中央に寝室、一番奥に厨房が置かれ、共通した平面を持っている。

このように福州の庶民街屋は官式街屋と多くの点で異なっており、それとは別な原理と起源を持っていると思われる。泉州の事例を紹介した後で、もう一度庶民街屋について考察してみたい。

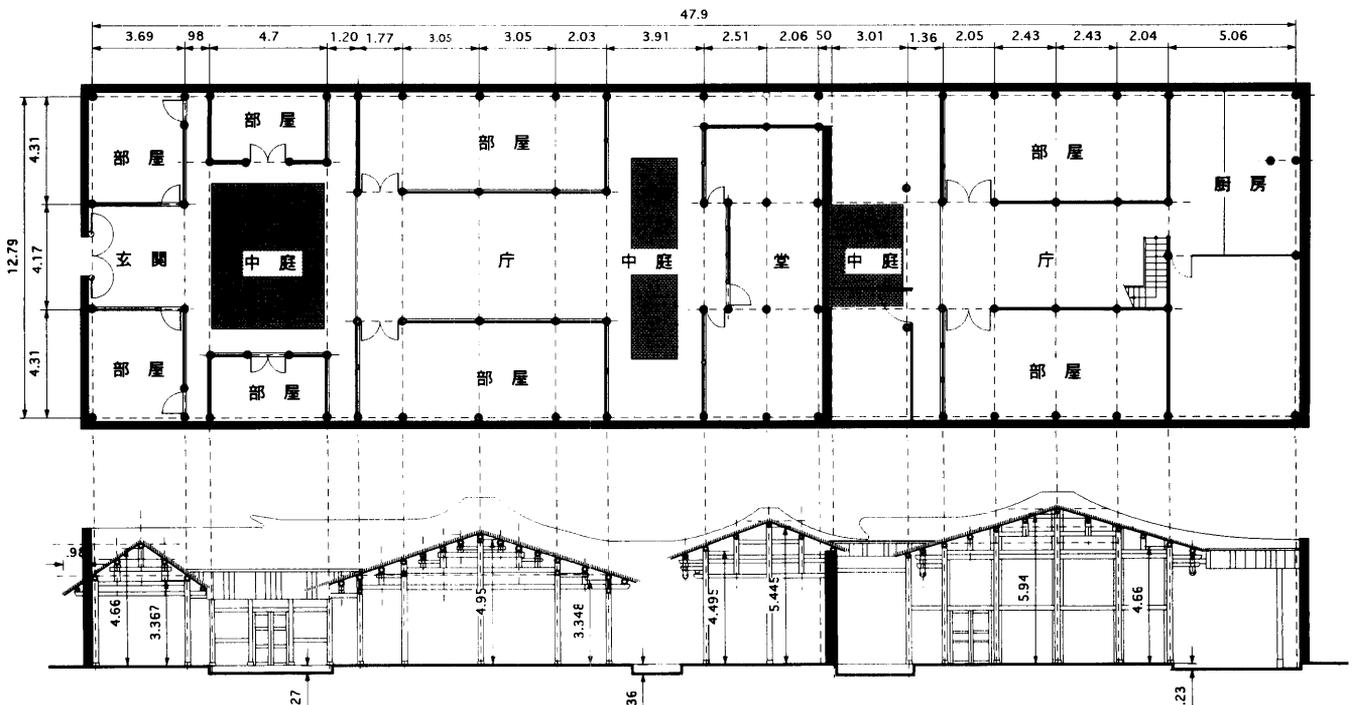


図3-3 福州の街屋 事例2

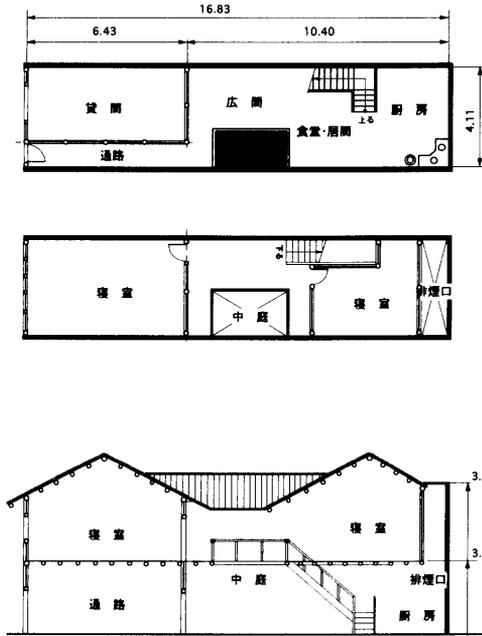


図3-4 福州の街屋 事例3

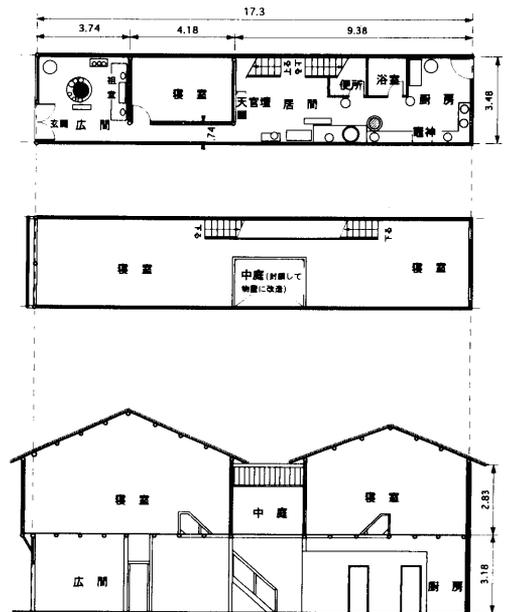


図3-5 福州の街屋 事例4

3.2 泉州

南シナ海に注ぐ晋江の上流数キロに位置し、唐代になって本格的な都市建設が始まった。唐代の最初期の城市は、中山路と西東街が出会う交差点を中心としたおよそ500m四方の大きさであった。歴代支配者は海外貿易を奨励し、宋代1087年にここに市舶司が置かれ、広州に勝る国際貿易港に成長した。この時代、城内は南方は今日の新門街と塗門街まで拡大し、蕃坊と呼ばれる外国人商人たちの専用居住地は城外南側の川岸近傍に置かれた。

元代にはイブンバトータやマルコ・ポーロがこの都市を「ザイトン」として世界に紹介し、中国随一の貿易港として繁栄した。城壁も拡大し、明代には南は今日の天妃宮を含むようにまでなっていた(図3-8)。清代に描かれた泉州府志によれば、城市南端にはこの天妃宮に加えて関帝廟と濱武廟が並んで立っていたことがわかり、この部分が港市にあたるであろう。蕃坊はさらに城外の南側に移され、外国人たちは聚寶街一带に中国人と一緒に住んだ。しかし、その後次第に河口に土砂が堆積して

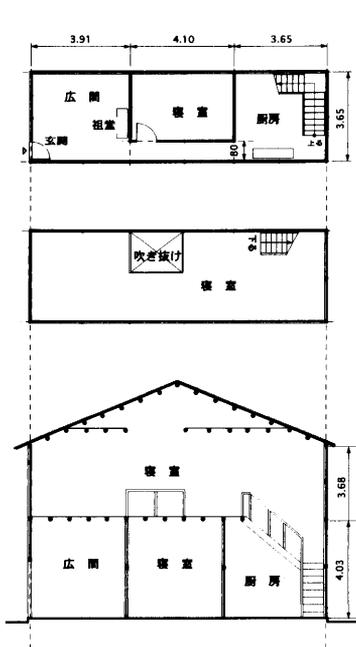


図3-6 福州の街屋 事例5

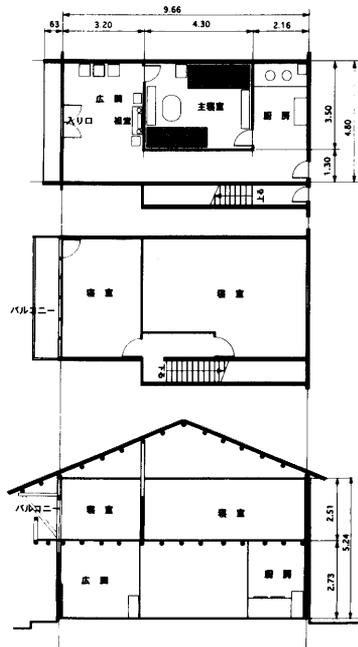


図3-7 福州の街屋 事例6

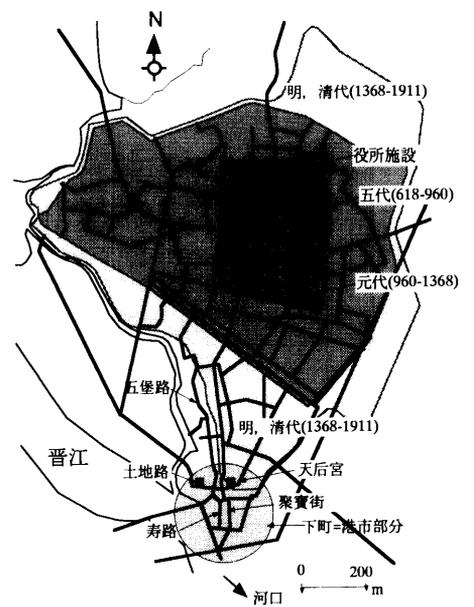


図3-8 泉州の発展過程

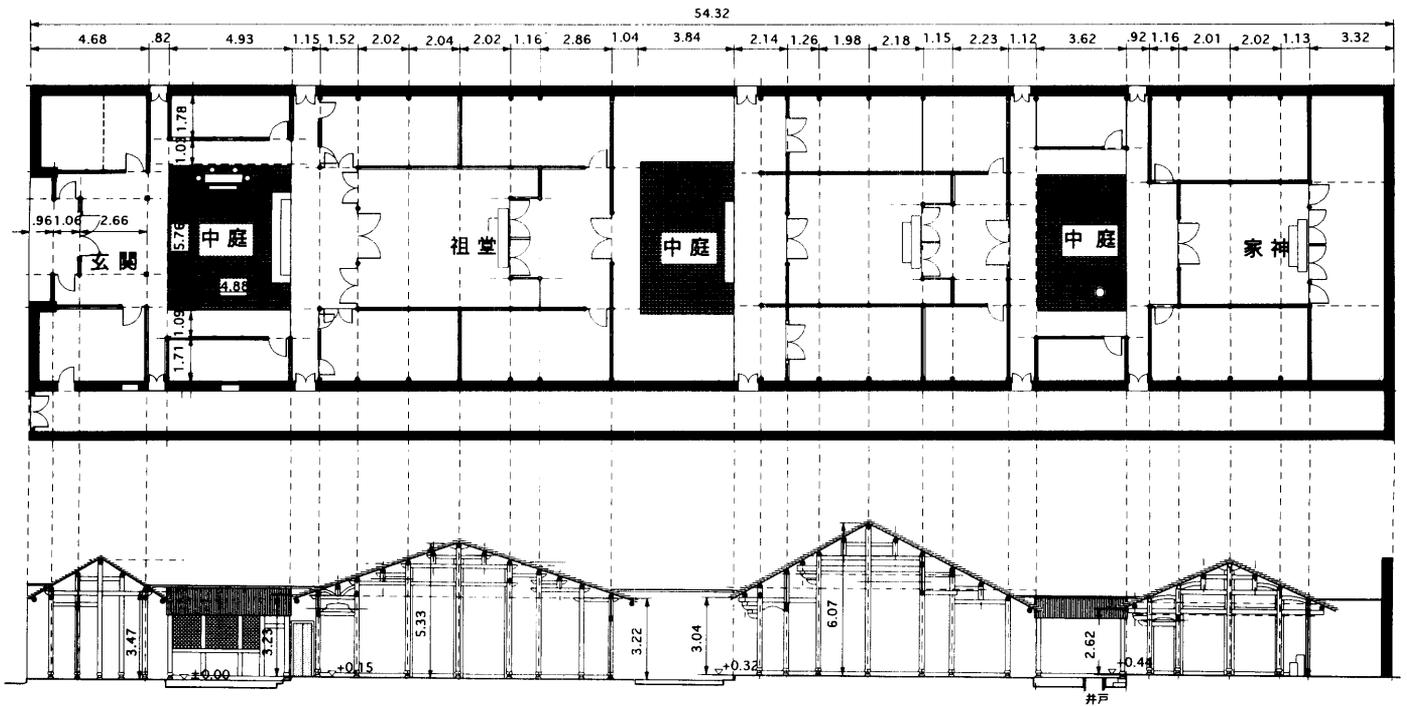


図3-9 泉州の街屋 事例1

船舶の遡航が困難になり、さらに明代1470年代には市舶司が福州に移され、主に台湾相手の地方貿易港に衰退していった。

1923年(民国12年)に泉州市政局が成立すると、城壁の撤去と街路の拡張が始まり、1937年に完了した。また、中山路のアーケード化とともに市街地の再開発も行われたのもこの時期である。

居住地パターン

清代までの城内は他の中国都市と同じようにさまざまな役所と仏教寺院が中心部に置かれ、他は官吏住居が大部分を占めていた。ところが、その官吏住居は福州のそれと違って多くが大型の1戸建てであったようで、組積造の壁で取り囲まれた屋敷が旧城内の景観を作り出して

いる。唯一例外は宋代になって城壁が取り壊され居住地となった后城古街巷で、この通りに沿って官式街屋が連続している。特徴は東西に小路が配置され、それに対して直角に、すなわち南北方向に街屋の軸線が走る。建物は背中合わせに配置されている。

居住地パターンについて、住居以外の歴史的建築は天妃宮しか現存していないが、古地図と街路名から天妃宮の東方に關帝廟が、また西方には土地廟があったことがわかる。さらに最も外国商人たちでにぎわった聚寶街を辿って南下すれば川岸に達する。このように天妃宮を中心にした東西方向と南北方向の2本の軸線があり、これは明らかに東南アジアの歴史的港市の居住地パターンと共通している。

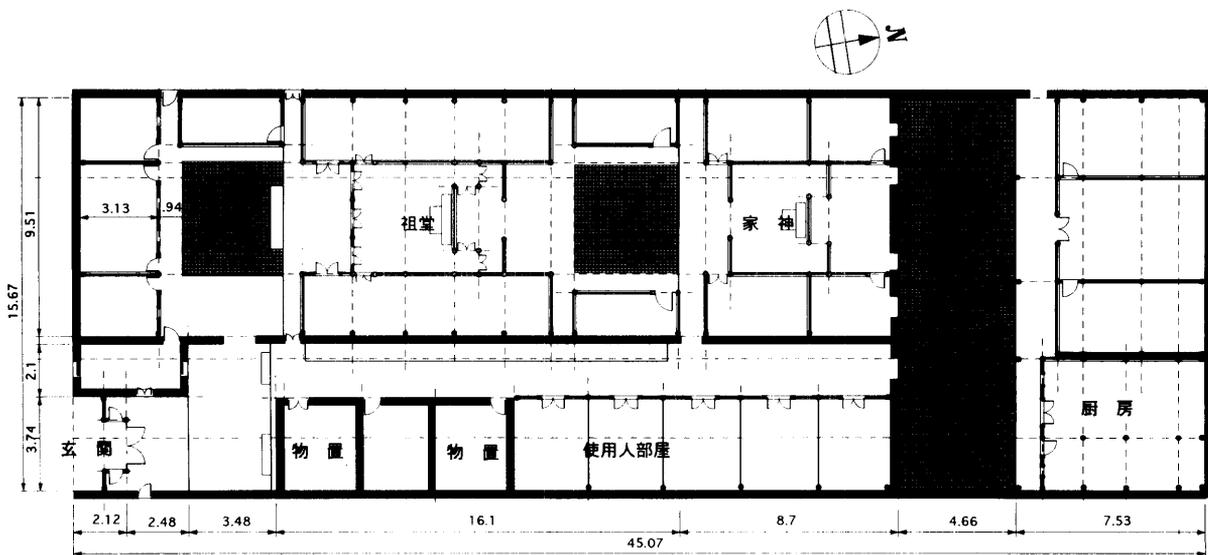


図3-10 泉州の街屋 事例2

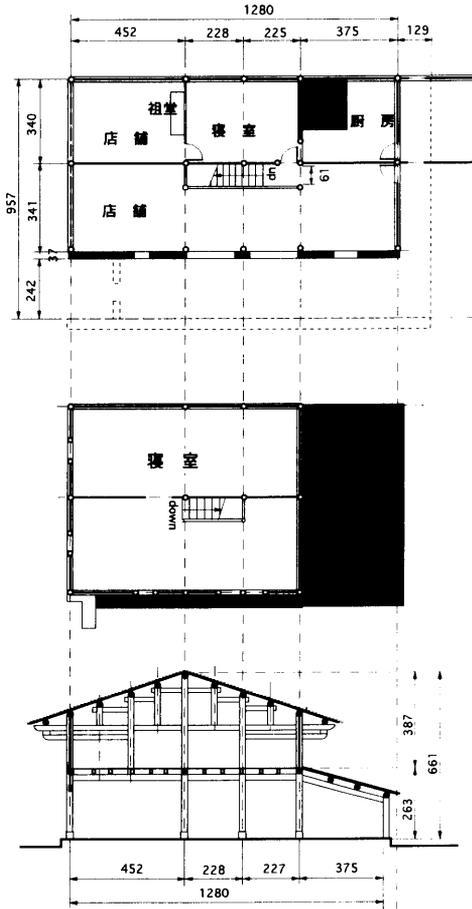


図3-11 泉州の街屋 事例3

街屋類型

取り壊される直前の后城古街巷の官式街屋7棟を見学し、そのうち2棟を実測した。福州の場合と同じように基本類型は1つであり、主屋の部屋は南北の軸線に対し左右対称に配置され、また棟と中庭が交互に奥に向かって連続する。さらに、サーヴィス用通路や使用人の住まいが片側に置かれ、主人家族の生活空間と明確に分けられている。小屋組は東立形式である。図3-9は3つの棟をもち、使用人の住まいを併設しないタイプである。図3-10は使用人の住まいをもつタイプで、一番奥に厨房と倉庫が置かれている。主屋の入り口が軸線上ではなく通用門と兼ねているのは何らかの信仰の理由によると思われるが、居住者が入れ代わっており確認することはできなかった。

城外南部の港市部分では10棟を見学し、そのうち店舗兼用になっているものと住居専用のもの各1棟を実測した。見学した建物は基本的に同じ平面と構造を有しており、1つの類型に入るものであろう。具体的には、1棟で構成され、中庭をもたず、左右対称ではなく、また複数の住戸が1度に建設されている。奥行きが浅い1棟形式になっているのは、街路が城内とは違って不規則に走っており、また奥行きが浅いことによるものと思われる。

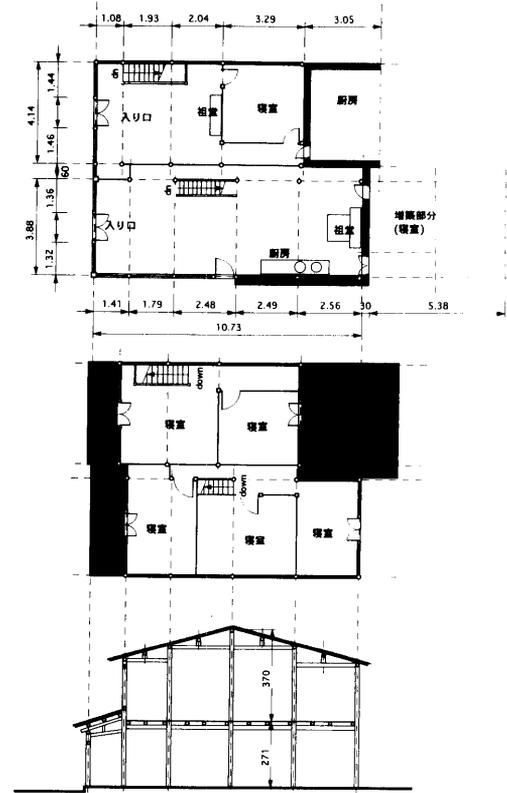


図3-12 泉州の街屋 事例4 & 5

図3-11は前方で雑貨屋で営み、中央部が寝室、そして奥が厨房という構成になっている。階段が1つしかなく、もともと1住戸として建てられたものである。図3-12は、清代中期19世紀半ばに建てられたといわれ、今回見た庶民街屋の中では最も古いものであった。これら2つは一見連続しているようだが、もともと独立する2つの建物として建てられた。前の事例との大きな違いは、1つは庇を持っていることと、階段が入り口の方に向いていることである。このような階段を持つ街屋は台

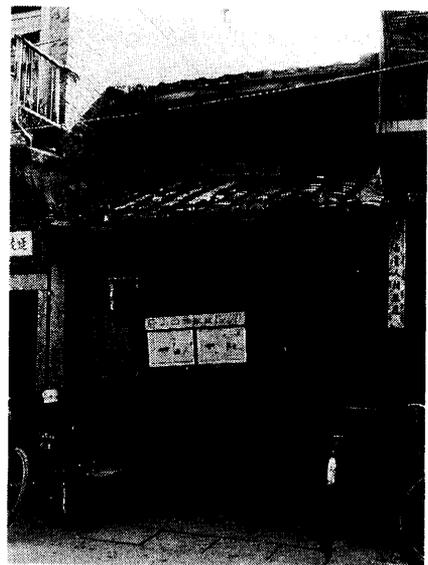


写真3-1 泉州の街屋(事例5)聚賢街

湾側の鹿港でも確認されている。この地区で明・清代最もにぎわっていたという聚賢街では、マラッカやスマランで見かけた街屋と同じ外観のものが3戸あったが、住んでいる人がおらず実測できなかった（写真3-1）。

4. まとめ

1992年度の前回の調査結果を含めると、「東南アジア」といわれる政治・経済上の地域ではなく、周囲の湾や小海を含む南シナ海沿岸地域の歴史的都市の居住地パターンと都市住宅の類型を検討してきたことになる。これらは中国の宋代からの中国南部の人々の海外渡航とともに、そこにあった居住地パターンと庶民街屋の類型が東南アジアに伝わっていったのであろう。外観だけではあるが泉州にマラッカ最古の街屋と同じものがあり、また居住地パターンにも共通点が見られる（表4-1）。

表4-1 福建地方都市と東南アジア港市の比較

	行政空間=城市部分 Mandarin City=Walled City	庶民生活空間=港市部分 Down Town=Port Town	東南アジアの港市 Port Town in Southeast Asia
機能 Function	政治、行政の中心地 Politc, Administration	庶民の生活、商業 Business (Commerce, Market)	庶民の生活、商業 Business (Commerce, Market)
居住地形態 Form	四角形、格子状街路、閉鎖的 Square, Grid pattern, surrounded by wall	線状、開放的 Linear, open to the Street	線状、開放的 Linear, open to street
住人 Dweller	行政官や軍隊が中心 Government Officer, Military	職工や一般労働者が中心 Merchant, artisan, laborer	職工や一般労働者が中心 Merchant, artisan, laborer
施設 Facilities	行政軍事施設、儒学校、公市場 Government Office, Military, Confucian School, Public Market	港湾、卸/小売り業、倉庫、廟 Market, Godown, Jetty, Mieu	港湾、卸/小売り業、倉庫、廟 Market, Godown, Jetty, Mieu
住居形式 House Type	官式街屋 Mandarin Style ○広い開口、深い奥行き ○2,3層の中庭 ○南北軸に対して左右対称	庶民街屋 Town-house, Shop-house ○広い開口、深い奥行き ○中庭なしの場合が多い	庶民街屋 Shop-house ○狭い開口、深い奥行き ○最低一つの中庭

これまで中国都市史研究というと、城市部分とそのなかの四合院住居が中心課題であった。しかし、都市のにぎわいという点では、マルコ・ポーロやイブン・バトゥータが驚嘆したように港市部分がその中心であり、これまでその居住地パターンと住宅建築についてはほとんど調べられてこなかった。宋代から明代初期にかけて南中国都市の港市部分にはこのようなにぎわいがあったが、しかしその後海禁政策によって港市部分が衰退に向かった。福建と広東両省の場合、長江流域の都市と違って内陸貿易に活路を求めることが出来なかったため、港市部分の衰退が特に顕著であったのであろう。

東南アジアの南シナ海沿岸都市の場合、現地権力や植民地権力によって建築規制の影響を受けても、中国系住民たちは大体において出身地の居住地パターン（図4-1）と街屋形式を維持した。大きな違いは、第1は街屋形式に関するもので、東南アジアでは街区の奥行きが深く、中庭を1つ以上持つ奥行きが深い街屋を建てることのできたことである。第2は都市居住の質に関して、中国南部では街路に一般的な日常生活があふれ出てくることはないが、東南アジアでは食生活だけが突出して街路に進出していることである。これは中庭のあるなしだけでなく、家族や社会の制度の違いからくるものなのかもしれない。

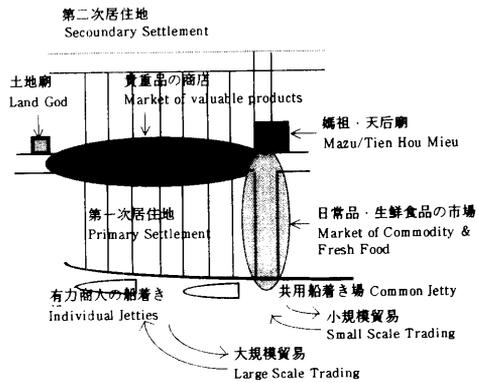


図4-1 港市居住地パターンのモデル

今回の一連の調査を通して、南シナ海沿岸は地中海沿岸と並ぶ独特な街屋建築と都市居住が存在する場所であることを強く感じた。

また、中国南部の旧官式街屋の調査において、居住者が入替わっていることが多く、清代の空間や室の名称を尋ねることができず、残念であった。

謝辞

現地調査において、ヴェトナムでは留学中の立命館大学博士課程の大野美紀子氏とフエ遺跡保存センターのヴ・フー・ミン氏、福州では福建省建築専科学校の李積権氏、泉州では華僑大学の方擁氏に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

<参考文献>

- 1) 華僑史, 1941.8
- 2) T.G. Magee: The Southeast Asian City, 1967
- 3) V. Purcell: The Chinese in Southeast Asia, 1971.5
- 4) 中国福建省・琉球列島交渉史研究調査委員会編: 中国福建省・琉球列島交渉史の研究, 1994.12
- 5) 高珍明, 王乃香, 珍瑜: 福建民居, 1987.5
- 6) 杜仙洲編: 泉州古建築, 1990.10
- 7) 頼玉雄: 福州旧城総合開発問題探, 福建建築, 1992.1, pp. 19-25
- 8) 黄世清: 泉州民居の演変発展, 福建建築, 1992.1, pp.13-16
- 9) 章興泉: 福建省城市特天と発展戦略, 福建建築, 1992.2, pp. 20-24
- 10) 載志堅: 福建地方伝統民居の地方特色, 福建建築, 1993.1-2, pp.19-21
- 11) 鄭力鵬: 福州城建發展史連載(続), 福建建築, 1993.3-4, pp.12-23
- 12) 古田元夫編: 海のシルクロードとベトナム, 穂高書店, 1993.11

<研究組織>

- 主査 泉田 英雄 筑波大学芸術学系講師
 委員 ヨハネス・ウイッド パラヒヤンガン大学講師/東京大学大学院
 協力 黄 俊 銘 中原大学建築系副教授
 // メイ・リー・チュア ダルムシュタット工科大学助手
 // 宇高 雄志 京都大学博士課程2年
 // 武部 豊 筑波大学学生4年